竜と戦女神の舞い降りた日

みるく日記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜と戦女神の舞い降りた日

【Ｎコード】
Ｎ３７６９Ｙ

【作者名】
みるく日記

【あらすじ】
王位継承問題で揺れるトランファ帝国に、王女の護衛騎士としてやってきたリア・フォーレン。
三人の王子様と彼女の間に起こる出来事とは？
４つの国を舞台にした、笑いあり涙ありの逆ハー物語です。

第1話　始まり（前書き）

2話連続更新で

第1話　始まり

はい、
我が主に忠誠を―。

レクテサス大陸。
この大陸には、東西南北に分かれた４つの大国がある。

西部をニキルナ帝国、
南部をナクサーマ王国、
北部をホアルル王国、
そして、
東部のトランファ帝国。

２００年もの長い大陸大戦を終え、西部と東部を中心とした四国平和同盟が結ばれた現在。

緑豊かな大地と軍事力を誇る大国の一つ、トランファ帝国の一室で国王ランリードは悩んでいた。

「とりあえず」

「ダメですね」

ランリードの言葉を即座に遮ったのは、トランファ帝国の影の支配者…いや、
指導者のザフィルである。彼は国王の右腕宰相としてトランファ帝国を支えてきた人物の一人だ。そんな彼も、今回本格的に表舞台に上がってきた議題について渋い表情を浮かべていた。

長期的戦争に終止符を打ち、賢王としてトランファ帝国を導いてきた国王ランリード。
そのランリードには、三人の息子達がいる。

そう…
議題として上がったのは、子供達のこと。

王位継承問題であった―。

「…そうか、分かった。」

必要最低限のことだけ言葉にし、実行に移す男。
トランファ帝国の第一王子クロウド・トランファ。

第一王子として若い頃から政務に携わり、父である国王の補佐を務めながら国内の法務を中心に取り仕切っている。
冷静沈着で完璧無敵の美形である第一王子は、艶やかな黒髪に青色の瞳が特徴的だ。
２８歳と婚姻を結ぶならば大変魅力的な好物件であるはずなのだが…
言葉数少なく、冷たい眼差しを向ける為か、周りの物達は怒っていらっしゃるのでは！？と、常にビクビク状態、遠巻き状態であった。

「ありがとう。それはこちらに。」

物腰柔らかい第二王子。
名をラファル・トランファ。
青色の髪に、透き通る翡翠色の瞳が特徴的だ。
中性的な美形で、青く長い髪を横に纏めて括っている。
常に穏やかな雰囲気を持ち、笑顔が絶えず誰にでも優しい王子様。
けれど、政務には厳しく２５歳の若さで財務のトップに就いているキレ者である。剣武は第一王子のクロウドには劣るものの、文官と

しての采配には光るものがある。

「おーい！ちょっ…何やってんだよ！？」

燃え上がるような短い紅色の髪に紅い瞳。
銀色の甲冑を身に纏い、訓練場を駆け回っている男。

第三王子、ジン・トランファ。

つい先日１８歳を迎え、王宮軍部隊長に任命されたジンは、現在訓練場にて竜の騎乗訓練を行っていた。

第三王子にして異例の軍部着任。
剣武も政務も兄達に劣るものの、休日には城下に下り民との交流を大切にする為、その知名度と人気は絶大であった。

また、執務室で座ってるよりも戦場を翔けるほうがいい…俺は竜に乗って戦場を翔ける！と、幼い頃からの夢を一途に目指してきたジン王子。

そして、その夢は叶う。

…今、挑んでいる竜に乗ることが出来れば。

「私は、ラファル様を推します」

宰相ザフィルは眼鏡をクッと上げ、ランリードの様子を伺う。

うーんと考え込むランリードは、次代の国王選びに頭を悩ませていた。

「やはり、お前はラファルか？」

「えぇ」

何をいまさら？と、鼻で笑うザフィルにランリードは苦笑いである。

「俺は、クロウドだな。」

そして、今まで全く言葉を発していなかった男。
国王付き近衛騎士団団長のダナンザ。第一王子クロウドの師匠として剣武を教えていたダナンザは、自信満々にランリードに告げる。

「はぁ。お前ら…」

国王ランリードと宰相ザフィル。それに、近衛騎士団団長のダナンダは昔から交流のある幼なじみである。

大戦から復興まで伝説的な偉業を成し遂げてきた三人だが、今　最も難しい難問にぶつかっていた。

王位継承問題。

自分達が作り上げてきた国を任せられる次代の国王選び。
ここ数年、三人は何度も討論を繰り返している。
そして、いよいよ大臣達も議題として上げ始めてきたのだ。
まずは三人で意見を纏めようと思い話し合ってきたのだが…

「お前はどうなんだよ？ランリード、まさか…また保留とか言うんじゃねぇだろうな？」

「そろそろ一人に決めて頂きたいですね？」

「……はぁ。」

宰相ザフィルは、第二王子ラファルを。
近衛騎士団団長ダナンダは第一王子クロウドを。

そして、
国王ランリードは、保留として問題は平行線を辿っていた。

今回も決まらない。
いつまでもこのままではマズイだろう。

膠着する問題に、ついにランリードは苦渋の選択をするのだった―。

第2話　出会い

「いってぇ…」

地面に寝転び、空を見上げる。
良い天気だなぁとか、空気が上手い！何て思うことはなく、痛みと悔しさだけが胸を満たしていた。

ジンは打ち付けた後頭部を摩りながら勢いよく起き上がると、甲冑についた土を手早く落とす。

ふと、兜の裏側に血がついているのが目に入った。
ため息と共に、上空を優雅に飛翔している竜を見つめる。

「…何で」

そっと呟いたジンの声は、おそらく上空の竜には届いていないだろう―。

１８歳を迎え、晴れて王宮軍部隊長の任に就いた第三王子ジン。

長年の夢である『竜に乗って空を翔ける！』のために現在、訓練場に足を運んでいた。

どんな竜だろうか？

高まる期待を胸に、竜の登場を待つ。そして…。

☆　☆

１６歳で軍部に入隊して初の竜演習の時。

俺は簡易テントで同期の奴らの演習を見ていた。

…は？王族だから、あと2年待てだって！？

入隊後に聞かされた内容に俺は、ただ愕然とした。

竜に乗る実力は充分備わっているのに、王族であるが故に法に縛られ、ジンは竜に乗ることも触れ合うことも出来なかったのだ。

第２８項

王族の単独騎乗は１８歳からとする。

また、接触も同じく禁止事項とする。

追記、一般騎士の騎乗許可年齢は１６歳からとする。

法のトップである兄上に何度も掛け合ってみたが、取り合ってもらえなかった。その度に、昔から付き合いのある友人達に、イライラをぶつけては嘆いていたな。今となっては懐かしい思い出だけど…。

漸く父上から『もう１８か～じゃあいいんじゃね？』と、忘れてた感満載な騎乗許可が下りたのは、つい先日のことである。

紅竜。
全身が俺の髪と同じような紅色の竜。
獰猛で攻撃的、炎を操る希少価値が高い竜なんだとか。

２年待って漸く手にした最高の竜とのご対面。

それなのに…、このざまか。
全く言うこと聞かないし、火を吹いて追い掛けてくるし。

竜に乗るには、相性と言うものがあるらしい。昔、クロウド兄に聞いたことがある。

竜を操る乗り手には、二種類のタイプがいると。
竜笛を使って竜を操る者と、生涯においてコイツだけ…と唯一の竜を見つけ、契約を結ぶ者。このタイプは竜笛なしで竜を操ることが出来るらしい。
まぁ、後者は大陸中探しても数名程度だが。

『お前は…どっちだろうな』

と、冷たい眼差しで俺に竜笛を渡してきた兄。

あぁ…俺は竜笛タイプか。と安心して紅竜に乗ってみれば、全く言う通りに飛ばなかった。

え？まさかの契約竜探しタイプか俺！？
いやいや、大丈夫だ。
乗れるはずだ！っと言うか絶対コイツに乗らなければ…。

王族が竜を探しに旅に出るなんて出来ない。
となれば…軍部から文官へと移動させられるだろう。
ジンはうぉぉ～と雄叫びを上げ、再び訓練を再開するのだった。

★
★

「〜で宜しいですか？」

「……あぁ。」

第一執務室
部下と書類の確認作業を行っている第一王子クロウドのもとに「入るぞ〜」と何とも軽い雰囲気で入室をしてきたのは、王宮近衛騎士団団長のダナンダである。

「こっ、困ります〜！」

そして、その後ろをワタワタと扉の前にいた近衛騎士達が追い掛けてきた。

「団長！勝手に入られては」

「まぁまぁ」

「今は政務中で」

「まぁまぁ」

「……」

度々繰り返されるダナンダと騎士達のやり取りを、クロウドはいつもの事だ…と切り捨て、黙々と作業を続けていた。

最終的にはダナンダの「密談だ！お前らは仕事に戻れ！」の言葉に、騎士達が「密談？ならばもっとコソコソ入室して下さいよ」とぼやき、出ていくことになるのだが。

「それでは、私も失礼致します。」

「あぁ」

作業が途中でも空気を読み、毎度退出をするクロウドの側近サイレン。

上位貴族階級出身で、次期宰相候補の男である。

「…何か？」

静かになったところで用件を聞くのも、いつものことである。
クロウドは手を休めることなく、次の作業に取り掛かりながらダナンダに問い掛けた。

「ランリードが動いたぞ」

「……」

どうやら今回は軽い内容ではないらしい。
クロウドはペンを止め、ダナンダに視線を向ける。
何の感情も表してはいないクロウドの青い瞳に、ダナンダはククッと笑みを浮かべた。

「ははっ。予想はしてた…って感じか？」

「ある程度は」

ダナンダは面白くない奴だな、と呟きながら資料を机に置くと、ソファーにドカリと腰掛ける。

『第一王子様の感情を揺さぶることが出来るような奴が、早く現れねーかな。』

過去、冗談交じりにクロウドに告げた言葉がダナンダの脳裏に浮かぶ。昔からクロウドの剣の指南役として面倒をみてきたダナンダであるが、今だにクロウドが何を考えているのか掴めていない。

何事も冷静に見極める完璧無敵の第一王子。
法務を司る者としては問題のない人材なのだが、その道は常に孤独である。
まぁ、本人は孤独とは思っていないのだろうが…。

ダナンダは、そんなクロウドだからこそ次代の国王に相応しいと考えている。

自分に厳しく、揺るがない道を、国をクロウドならば作っていくだろうと…。
しかし、

「内容は分かりました。貴方は、私を推したようですが私は」

「師弟云々抜きだ。俺は、お前ならば率いていけると思っているからな。」

「…そうですか。」

クロウドが政務に携わるようになってから数年後。

『王の座に興味はない』と、国王に告げているのをダナンダは偶然通り掛かり知った。

王になりたい、なりたくない以前に、興味がないとは。

それは一番厄介な答えだと思った。

賢王に相応しい技量を持ち、愚王へと成り果てる可能性を持つ関心力のなさ。

あぁ…。

何でもいい。誰でもいい。大切だと、守りたいと思えるものがコイツに見つかれば…。

ダナンダは、国の未来とクロウドの今後の行く末を思い、深くため息を吐くのだった。

★

★

「…父上が？」

北に位置する法の第一執務室とは対称的に、南には財を司る第二執務室がある。
報告を受けた第二王子ラファルは、宰相ザフィルに驚きの表情を浮かべた。

「えぇ。これによって国王は何らかの進展、あるいは結論を出すのではないでしょうか」

「後継者問題ですね」

ラファルは、漸く動き出したか…と呟く。
中々進展しない問題に兄弟間の内乱が起きる可能性を考え、今まで色んな方面で対処抑制をしてきた。

第一王子と第二王子を指示する貴族家間の対立は、自身が幼い頃からすでに始まっており、最近では動きが活発化してきている。国を王族間の内乱で弱体化させる訳にはいかない、とラファルは宰相のザフィルと共に水面下で動いていたのだ。
そんな中、漸く国王ランリードが動き出した。

「それにしても、まさかナクサーマ王国とは。」

「えぇ。西を刺激することにならなければ良いのですが。」

大きな変化が齎されることになるだろう。
二人は新たに発生する問題を考え、早期対処に取り掛かるのだった。

★　★

「うわっ！？」

失敗の連続にジンの体が悲鳴を上げる。
背に乗っただけで振り落とされる現状に、周りの隊員達はどうしていいか分からずにいた。

竜笛の旋律に間違いはない。それなのに、ジンが騎乗した瞬間に紅竜が暴れ出す。

何が悪いんだよ！！とジンは拳を地に打ち付ける。

殆どの場合、初騎乗というのは竜と乗り手が緊張しているせいか上手くいかないことが多い。
しかし、２度目以降はすんなり騎乗出来るものなのだ。

どうしたらいいんだ？と、周りの隊員達が騒ぎ始める中、突然ジンの竜笛が音を立てて割れた。

「「「「っ！？」」」」

皆の動揺する声に、ジンはゆっくりと竜の額に視線を向ける。
すると、竜本来の力を抑えておく拘束具に亀裂が入っていたのだ。

「ばかな…」

高位の竜には、本来の力を抑え、飛翔力を高めるために光石と呼ばれる拘束具がはめ込まれる。
これは、鉱石の中で頑丈な部類に入り、簡単に砕けたり、亀裂は入らないものである。

その拘束具に亀裂が入った。それは、竜の制御が出来なくなったこ

とを意味している。

ヴォォと唸る竜に皆が青ざめ、後退する。
竜はギロリと男達を見下ろすと、口から小さな炎をいつくも生み出し始めた。

ジンは咄嗟に「逃げろ！」と隊員達に叫ぶ。

竜の口先に集められた炎は、今までの熱量を遥かに越える大きさになる。
放出されれば一溜まりもないだろう。

幸いにも、今いる訓練場は王都からは離れた所にあり、後方は自国の山々だ。

ジンは隊員達に離脱するように命令を出した。

ヴオォォォ〜！！

隊員達の離脱と共に竜が雄叫びをあげる。

素早く離脱する隊員達。
しかし、そこで問題が起きた。

竜のプレッシャーに動くことが出来なかった隊員がいたのだ。
ジンは舌打ちし、再び中心地へ舞い戻る。

叫ぶ竜と隊員達の悲鳴。
ジンを守ろうと果敢にも後を追う部下達。

「クソッたれ～！！」

隊員達と自身の置かれた状況に、ジンは死を覚悟した。

その時、

「失礼」

隊員達とジンを飲み込もうと、眼前に迫っていた炎が着弾する手前で跡形もなく消え去った。

舞い降りた天使―。

黒いマントを靡かせ、紅甲冑を身に纏った後ろ姿。
その姿は、とても神々しく忘れられない光景になるだろう。

これが
俺と彼女の出会いだった―。

第3話　同盟

艶やかな漆黒の髪を靡かせ、白剣を右手にヒラリと舞い降りた彼女は、紅竜に向かって剣を構える。

紅竜は動かず彼女を見つめている。

「…ジン様。」

「なっ何だ？」

膠着状態に入り、ジンの前に立つ一人の隊員が恐る恐る口を開いた。

「あの剣を見て下さい」

「？」

「紋章が」

「紋章？…あれは、ナクサーマ王国か！？」

ジンは剣の紋章を視界に入れ、驚きに目を見開いた。

南部に位置し、緑豊かな大地と鉱山を持つナクサーマ王国。四国の中では占める領土が1番少ない小国ではあるが、鉱山から取れる特殊な石で最高の武器を作ることが出来るとして有名である。

「何故ここに…？」

大陸大戦においてナクサーマ王国が侵略を防ぐことが出来たのは、最強と謳われた一人の騎士の活躍があったからだと言われている。

白竜を自在に操り、紅い甲冑を見に纏った黒髪の女騎士。名はリア・フォーレン。

劣勢になろうとも、彼女の参戦が盤上をひっくり返す。
そして、国を勝利へと導くのだ。
数々の戦火を駆け抜けた彼女は、次第に戦女神と呼ばれ各国の間で名の知れた騎士となる。

大戦後、彼女はナクサーマ王国の騎士団長になった、と言うのは有名な話だ。

「静まりなさい」

凛とした声に紅竜はピクピクと鼻を鳴らす。
一歩、また一歩とゆっくりと紅竜に近づくリアを、
ジンを含め隊員達は、じっと見守っている。

リアは紅竜の鼻先に辿り着き、左手をゆっくりと伸ばす。動くことなくリアを見つめる紅竜。

ペチッと鼻先を手の平で叩くと、紅竜の鼻がピクッと反応を返し、
大きな目がパチパチと瞬く。
両者動かず、一刻程静止状態を保ち、紅竜がゆっくりと頭部を地につけ目を閉じる。

リアの一連の動作に、ジンも隊員達もゴクリと喉を鳴らす。
そして、何故？と疑問を浮かべた。

それは、さっきまで暴れていた竜が…今は、スヤスヤと眠っていたから。

「すみません。少しよろしいでしょうか？」

紅竜の前に立ち、首を傾げながらゆっくりと口を開く。
ジンと隊員達は、彼女の元へ足早に近づくのだった―。

【ナクサーマ王国】

「トランファ帝国と二国同盟を結ぼうと思う」

謁見の間にて、国王から告げられた言葉に皆が驚き、ざわめく。

確かに…大陸大戦終結から僅か二年しか経っておらず、未だ危ういい四国間の関係。

東部と西部、どちらかと二国同盟を結ぶことが出来れば今後、小国のナクサーマ王国にとって心強い後ろ盾となるだろう。

「何故トランファ帝国なのですか？」

疑問を投げ掛けたのは、王の側近く上段に座する第一王女エルメアだ。

ストレートの金色の髪に強気な眼差しが特徴的である。今は突然の国王の言葉に戸惑っているようだ。

その隣、左側に座っているのは第二王女のステラである。短く整えられた金色の髪に、知的さが伺える切れ長の瞳が特徴的である彼女は、今はただ黙って成り行きを見守っている。

ステラの左隣には、第三王女のメルリーンが金色の髪の束を指でクルクルと弄りながら座っている。
どうやら長引く話し合いに飽きてしまっているようだ。

国王はエルメア王女の問いに、よくぞ聞いた！と笑みを浮かべ、答えた。

「ははっ。トランファ帝国には、将来有望な王子が三人もいるからな。お前達の誰かが嫁ぐことになれば…二国間の関係が強固なものになるであろう？」

従属国ではなく、あくまで対等に同盟を結ぶと言う国王の言葉に、広間にいる者達が「おぉ～」と声を漏らす。

「そっそれは…ラファル様と結婚出来るかもしれないと言うことですの！？」

国王の言葉に勢いよく椅子から立ち上がったのは、先程まで早く終わらないかな～と、髪を弄っていたメルリーンだ。

四国平和同盟後の晩餐会からラファルに恋慕していたメルリーン。

うそ!?ラファル様と!?キャ〜!どうしよう!!と、一人興奮している。

「ん?その名は…第二王子のラファル・トランファのことか?…ほぉ〜、メルリーンは第二王子が気になるのか?」

顎髭を摩りながらニヤニヤと問い掛ける国王に、メルリーンは「あぅあぅ」と顔を赤らめている。

「お父様、わたくしはクロウド様をお慕いしております!」

国王が国家間の婚姻を望んでいると思い、負けじと声を張り上げたのは第一王女のエルメアだ。
第一王子のクロウドの名を聞き、国王は「ほう」と頷く。

娘達の反応に機嫌をよくした国王は「そうかそうか。」と笑みを浮かべる。

「お父様、確か北部にも西部にも、有望な方はいらっしゃったはず

です。何故トランファ帝国をお選びに？」

そこへ、今まで黙って静観していた第二王女ステラが口を開いた。

国王は、ふむ。と何かを考えるように顎を摩ると、再びステラに視線を向けた。

「隠すこともなかろう。…実はな、この同盟の話しは向こうから、トランファ帝国からの話しなのだ。」

国王の言葉に王女達含め、広間にいる臣下達も驚きに目を見開き「なんと！？」と、再び声を漏らした。

大国であるトランファ帝国からの同盟話。小国でありながら大国と対等な同盟を結ぶと言うことは、自国の力を認められた、と言うこと。また、今後の発展と他国侵略からの相互保護、助力を可能にすると言うことである。

従属国ではなく、対等な扱い。

そこに王族同士の婚姻が成されれば、同盟破棄は先ず間違いなく起こらない。

広間にいる重鎮達は、自身らの力が大国に認められた、喜ばしいことだ！と、誇らしげに頷き合っている。

「その同盟は、婚姻が前提なのですか…。」

ステラのみ愁いの表情を浮かべながら、スッと立ち上がる。

「申し訳ありません、お父様。私は辞退致します。」

凛と広間に響くステラの言葉に、感慨に耽っていた重鎮達は、ギョッと目を見開いた。
国王も何故だ！？と、驚き椅子から立ち上がる。

「特に気になる方がおりませんので。…それに、二人とも私がいない方がよいのでは？」

フフッ、と不敵な笑みを浮かべるステラに、エルメアとメルリーンは「そっそんなことないわ！」「そっそうよお姉様！」と、言い返す。
二人とも引き攣ったような表情だ。

ステラ王女は、三人姉妹の王女の中で1番美しく、聡明な王女と言われている。
切れ長の瞳が聡明さを際立て、耳にかかる金色の髪は絹のような柔らかさだ。
ある時から国の政務にも携わり、その才覚を遺憾無く発揮している。
文官が舌を巻くほどに。

物事考えず、体当たり精神のエルメアに、甘えん坊全開の幼いメルリーンでは、いい様にトランファに操られてしまうかもしれない。ステラ王女ならば操られることなく対等に、そして、ナクサーマ王国を更に発展させることが出来るに違いない！！と、国王と大臣達は考えている。

しかし、そんな意図に気づいてかステラ王女の反応はイマイチである。

うぬぅ！！何と言う切り替えしだ…。
大臣達が同盟のメリットを上げていく。しかし、笑顔でその言葉を交わし、見事に丸め込んでいくステラ。
ステラの弁舌に大臣達は撃沈。国王もタジタジだ。

やはり彼女でなければダメなのでは？
空席の騎士団長の席を何人もの大臣が見つめている。

軽くあしらわれ、説得は無理。エルメア王女とメルリーン王女で行くしかない…と、皆が諦めかけた
その時、広間の扉がゆっくりと開いた。

「ただ今戻りました陛下。」

カツカツと青い甲冑を響かせ堂々と入室をした男は、ナクサーマ王国の騎士団副団長のゲンイーク。

３０代半ばを過ぎたゲンイークは、正に騎士のお手本のような屈強な身体付きである。
また、その堂々たる態度に広間で守備をしている彼の部下も羨望の眼差しを向けている。

「おぉ！ゲンイークか！よく戻った！！」

突然の入室にも関わらず、国王はゲンイークの帰還に喜び、歓迎する。

「はっ、無事任務を果たして参りました。彼女もそのまま向かわれましたので、ご安心を」

ゲンイークは恭しく礼をとり、国王に報告する。
国王は「まことか！？」と驚きを現にし、チラリとステラを見た。

「ゴホンッ。あ～ステラ、やはりお前にもトランファ帝国へ行ってもらいたいのだが」

「お父様、先程も申し上げましたが」

「実は、フォーレン団長がすでにトランファへ向かったのだ。」

「……え？」

またか、とステラは不機嫌な様子を隠さず拒否を宣言しようと口を開いた。
しかし、国王の言葉に目をパチパチと瞬かせ、思考が停止する。
ステラの状態に国王は、よし、いけるぞ！と、さらに言葉を繋ぐ。

「この度の件、娘達の守り手に彼女は外せないからな。すでにトランファ帝国へ向かってもらったのだ。
…どうする？」

ステラは「…リ…ア」と小さく呟く。

「残念だな…。彼女にはステラは行けなくなった。と伝えなくては

ならんか。」

国王は、はぁ～とため息を零し、副団長へ「早馬を…」と向き直る。
と同時に、ガタンッと椅子を鳴らしステラは立ち上がった。

「お父様！私、参加致します！是非！お願いします！！」

国王と大臣達は、満面の笑みを浮かべるのだった。

第二王女
ステラ・ナクサーマ
１８歳。

趣味：
リアとお茶すること

好きなこと：
リアと一緒にいること

好きなもの：
リアの好きなものが好き

嫌いなもの：
リアが嫌いなものは嫌い

今後の夢：
リアと一緒に過ごせれば満足

口癖：
「リア以外どうでもいい」

第二王女ステラを動かすことが出来るのは、騎士団長リアが関わる時だけである―。

第3話　同盟（後書き）

ステラ王女はリア狂愛主義

第４話　何故こうなった？

何故こうなった…？

頭を摩りながら、ジンは紅竜の上で混乱していた。

遡ること、
リアが舞い降りてから―。

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

リアの凛とした声に我に返ったジンは、足早に近づいていく。
もちろん、警戒することを忘れずに。

何故ナクサーマ王国の者が？
しかも、こいつは…。

ジンは額から流れ出る汗に顔をしかめながら、リアの前に立った。

「ナクサーマ王国の騎士が何故我が領土内にいる？」

高圧的な態度で問い掛けるジンに、周りを囲む隊員達も警戒体制をとる。

ビリビリと緊張感漂う中、リアはゆっくりと口を開く。

「もうトランファ帝国内だったのね。」

方向は合っていた…と、ブツブツ呟くリアに、ジンは自分の問い掛けを無視されたと、眉間にシワを寄せた。
隊員達は剣に手を当て様子を伺っている。

「おい」

「でも地図がな」

「おい！！」

「ん？」

一人納得しているリアに、痺れを切らしたジンが声を荒げて呼びかける。

リアは、何？と首を傾げながらジンへ視線を向けた。

「何度も言わせるな！何故ナクサーマ王国の奴がここにいる！！」

（剣を構えているのに全く動こうとしない、警戒もしないなんて。余裕があるからか、バカにされてるからか…。）

ムキになって剣を引き抜き、引っ込みがつかなくなったジン。

（いやいや！他国に侵入してるんだから、このまま見逃しちゃダメだよな？）

よっ、よし！と、自分を納得させ、とりあえずリアを拘束する為に、ジンは隊員達に合図を送った。

隊員達はジンの視線を確認し、小さく頷く。

皆がタイミングを合わせ、同時に動いた―。

冒頭に戻る―。

（何故こうなった…？）

隊員達は、紅竜のスピードに追いつくことが出来なかった。

拘束された俺は、紅竜の背中に括りつけられている状態だ。そして、

二人乗っているのを感じさせない華麗な操縦捌きを披露しているのは、ナクサーマ王国の女。

「何なんだいったい…。」
ジンは空の上で小さく頷いた。

☆　★

一斉に切り掛かった俺と隊員達。
そこまでは覚えている。
その後は…全く見えなかったが。

白い剣を地面に突き刺したリア。
砂塵が舞い上がるのと同時に、隊員達のもつ剣が後方へ飛ばされていく。
隊員達は剣が飛ばされたことで一瞬の隙が生まれ、次々と倒されていった。

ちなみに、ジンは砂塵が目に入り戦闘不能。

（だあぁぁ～！何なんだこの状況は！？）

抵抗する暇もなく、あっという間にジンの手足を拘束したリア。（

と言うか気絶してて覚えてない。）

ジンを悠々と担ぎ、リアは眠っている紅竜の上に転がす。

ビックリした紅竜が飛び起きたのだが、リアが鼻に手を当てると不思議と大人しくなった。

そして、

「追いたければ、ご自由に。」

倒れている隊員達に挑発的な一言告げて、飛び立った。

「「ちょ、…え！？」」

白昼堂々の人攫い発言に、倒れていた隊員達は慌てて後を追いかけたのだが、紅竜のスピードに追いつくことは出来なかった。

高位の竜のスピードって半端ない。

「うわっ！？何だこのスピード！？」と、目が醒めて空の上ビックリ状態のジンは、思わず叫び声を上げてしまった。

リアは一瞬だけ視線を向けたが、何も言うことなく再び前方に向き直った。

隊員達の「待て～！」の叫び声は、遥か彼方である。

第5話　☆リア視点（前書き）

続けて更新！！

第5話　☆リア視点

「トランファ帝国？」

飛竜から降り立った私に、国王の言葉を伝えにきたのは副団長のゲンイーク。

私が騎士団に入隊した時、確か二番隊の隊長だった男。
広い視野と冷静な判断力をもち、周りからの信頼も絶大。
もちろん、実力も抜きん出ていた。
何故か私とは剣を交えたくない、と言わんばかりのすれ違い訓練日程だったから、結局の所実力はよく知らないけど。

将としての才覚に溢れ、決して傲慢でない態度が人気の秘密なのか？
仲間からの信頼もあつく、彼の周りには常に人が集まっている。
ずるいよね。私なんて、皆から滅多に話しかけられないのに！

ゲンイークは大戦中盤から最前線へ立ち、的確な指示と戦略によって大勝利を治めた。他の部隊の救援まで行っていたのは二番隊、彼の部隊だけ。
そして大戦終結後、彼は騎士団の副団長に任命された。

「はい、早急にトランファ帝国へ向かうようにと。」

一兵士でしかなかった私が大戦の功績で団長に任命されたのをどう思っているのかな。
きっと小娘のくせに生意気だ！とか思ってるよ。絶対思ってるね。

国王の命令なら行くしかない。
トランファ帝国…か。
確か他国に比べ軍部の力が強く、大戦中もかなり手強い兵士が多かった国。そして、今から向かうのは王城。
以前は敵国だった国の中心部。
想定外の事があったら、そのとき対処すればいいか。

「詳しくは、こちらに。」

「ありがとう。

ゲンイーク…、あとは任せるから。」

書状を懐へ仕舞い、再び飛竜へ跨がるリア。
リアの凛々しい雰囲気に、周りにいる隊員達はゴクリと唾を飲み込んだ。

空へと舞い上がるリア。
騎士隊員達は羨望の視線を向け、一斉に最敬礼を行う。

リアの乗った飛竜が見えなくなり、部下へと向き直るゲンイーク。

「これより、ナクサーマ王国へ帰還する！」

引き継いだのは、無事に帰還することと王城の警備である。団長不在に敵国の侵入は許されない。

「あとは任せる…か。」

（信頼しての言葉なのか、警告かは分からないが…。）

ゲンイークはリアの飛び立った空をもう一度振り返った。

その瞳には、微かにだが熱情が浮かんでいた―。

☆　★

クワァァ～、と時折鳴き声を上げる飛竜を宥めながら単身トランファ帝国を目指すリア。

先程まで訓練中だった為、飛竜はまだ興奮しているようだ。そのお陰で通常よりも飛翔スピードが速い。

何処かで休憩を取るべきなのだが、今はタイミングよく追い風に乗っている状態。

（出来ればトランファ帝国領内か、国境まで進みたい。）

リアが、う～んと考え込んでいると再び飛竜が鳴き声を上げた。しかし、先程とは違い今回飛竜が上げた鳴き声は、後方から何かが急接近してくるという警戒の鳴き声だった。

（…何？）

リアは飛竜の上で体勢をずらし、後方に視線を向けた。

後方から迫るのは黒い物体。一見、巨大な一つの生物のように見え

るそれは、目を凝らすと全容がすぐに分かった。
それは、一つの生物などではなく、何十、何百といった小さな羽虫が集まった集合体だ。
“ビーカブル”
トゲ羽を使った攻撃とスピード力に特化している生物で単体での攻撃は微弱だが、集合体としての攻撃は厄介である。

「うひゃっ」
リアは、大の虫嫌いである。
逃げ切れないと分かり、急旋回と同時に剣を引き抜き、羽虫の集合体へ向け先制攻撃を仕掛けるリア。
羽虫達は攻撃を避けようと一斉に方向転換をするのだが、リアの繰り出す剣圧と飛竜の風圧により、次々と数を減らしていった。
（よし！このままズバァ～と行くよっ！！）
一定距離を保ちながら斬撃を繰り出すリア。
半数以上を切り捨て、このまま一気に片をつけよう！と思った矢先、問題が起きた。
羽虫達が攻撃の方向性を徐々に変えていったのだ。
その方向は、飛竜。

（マズイな…。腹部と尾への攻撃はここからじゃ防げないよ！）

回避しようと飛竜がスピードと回転力を上げるが、それが付加になり、リアの攻撃の手が止まってしまう。

打開策を…と、猛スピードの中、ふとあるものを見つけたリア。
それは、他とは違う赤い羽を持った羽虫の司令塔の姿だった。
リアは手綱を操り、司令塔羽虫の真上へと飛竜を誘導する。
そして、飛竜の下降スピードに合わせて勢いよく飛び降りた。

クッと歯を食いしばり、リアは一本の矢のように一直線に進んでいく。

（見えた！！）

真っ黒の羽虫達の中にある唯一の赤い羽虫姿を、リアが見逃すことはない。

はあぁぁぁー！と雄叫びを上げながら白剣を振るう。
頭部から真っ二つに両断された赤い司令塔羽虫は、奇声を上げることすらなかった。

「あぁ～！緑色？！いやー！」と、寧ろ悲鳴を上げたのはリアであった。

☆

司令塔羽虫の消失により、周りを飛び回っていた羽虫達が散り散りになっていく。飛竜に攻撃を仕掛けていた羽虫達も同様に、司令塔

羽虫がいなくなった為に飛竜への攻撃をやめ、グルグルと旋回をしている。

飛竜は、降下していくリアの肩を両腕で難無く掴み、リアの胸へと首を伸ばした。そして、リアが腕を伸ばしたのを確認するとフンッと勢いよく頭を上げ、再び背中へと導いた。

司令塔の羽虫がいない今、周りを飛び回っていた羽虫達は散り散りに去っていくだろう。
長居は無用！（と言うか気持ち悪いからこれ以上は無理！）とばかりに、羽虫達を振り返ることなく、リアは先へと進むのだった。

☆　★

リアは、常備している地図を懐から取り出すと慣れた手つきでそれを広げた。

「この辺り…か、それともこっちかな？」

速度を和らげ、現在位置を確認しながら飛行する。
上空から見える景色は、見慣れない緑色の山々である。

大戦中、最前線に立っていたリアだが、防衛が目的であり他国へ攻め入るということはなかった。
その為、地図上では知っていても実際に他国の領域内を目で見ると言うのは今回が初めてなのである。

（ナクサーマと地形が全然違うなぁ～。）

リアはどうしたものか、と頭を振り再び地図に視線を向けた。
リアが何度も地図をなぞっていた
そのとき、

クウゥゥゥ！！

「！？」

突然飛竜が急降下し、地図がリアの手から舞い上がる。
と同時に、炎の塊が物凄い速さでリアの頭上を通り過ぎていった。
あっという間に地図が炎に飲み込まれていく。

リアは、地図が消えていった姿を見て小さくため息を零し、フッと
眼下に視線を向けた。

そこには、ギラリと目を見開いた紅竜。
そして、

（あれは…トランファ帝国の兵士？）

青色の甲冑の集団。
トランファ帝国の兵士達の姿があった。

「…？」

演習中だと思ったが何処か様子がおかしい。
逃げ惑う兵士達の姿にリアは首を傾げ、目を凝らしてみた。
どうやら紅竜が暴走しているようだ。
倒れ込んでいる兵士と、それを庇うように紅竜に対峙している兵士。
紅竜は、二人に向かって炎を放とうとしている所であった。
膨大な熱量を注ぎ込んだ炎の塊は、大人二人を容易に飲み込んでしまう大きさだ。

リアは、手綱を引き飛竜を急降下させる。
そして、白剣を引き抜くと飛竜の背から紅竜に向かって飛び降りた。

☆　★

炎の塊を切り伏せ、紅竜の前に降り立ったリア。
強者の雰囲気（オーラ）を嗅ぎ取った紅竜は、リアの構えている白剣と瞳をジッと見つめている。
一触即発の中、先に動いたのはリアである。

白剣を下げ、一歩一歩近づいていく。そして、ペチッと紅竜の鼻先に触れた。紅竜はパチパチと瞳を瞬かせ、リアの手をフンフンと嗅いでいる。
リアが手に載せているのは、緩和作用のある草だ。
香りを嗅いだ紅竜は、ゆっくりと雰囲気を和らげていった。
リアは紅竜の瞳を見つめながら鼻を撫で、紅竜の気を鎮めさせる。

リアの傍らで休み始める紅竜。

（なんでこんなに興奮してたんだろ？）

痛いほどの視線を感じたリアは、とりあえず疑問を頭の片隅に置き、振り返った。

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

☆　★

（うん。すでにトランファ帝国領に入っていたようだ。よかったよかった。）

リアはホッと胸を撫で下ろし、上空を見上げた。

（あ！？…地図ないじゃん。トランファ帝国に入った！ゴールはもうすぐ！と思ったのに。）

「おい！」

「ん？」

ガックリと肩を落とし、これからどうしよう？と悩んでいると、一人の兵士が声を荒げているのに今やっと気がついたリア。

目の前で顔を赤くしている男は、ずっと何か叫んでいたようだ。

「何度も言わせるな！どうしてナクサーマの奴がいるんだ！！」

（…何でこの人怒ってるんだろ？）

一斉に剣を引き抜いたトランファ帝国の兵士達と、よくわからないが憤慨している男に、リアは首を傾げてしまう。

（あれ？）

そのとき、一番近いところにいた男から蘭菖の香りを嗅ぎ取ったリア。それは、興奮作用のある花の香り。

（コイツだ！）

リアは匂いを消すために地面に剣を突き刺した。
砂埃が辺りを覆い、混乱からか？トランファ帝国の兵士達が何故か剣を振り回し始めた。

（あっ、危ないな！）

リアは、この人達にも興奮作用が働いてるんだ！と気づき、一人一人優しく？鎮圧していくことにした。

うぅ…と呻き声を上げる男達の中から（痛くした覚えはない！）香りの発生源を捕まえたリア。

（う～ん、やっぱりまだ匂うなぁ…。）

緩和作用のある薬を紅竜の鼻に巻き付け、気絶している男を紅竜の背に乗せる。

そして、

「追いたければ、ご自由に。」

すぐに動くのは辛いだろうから、後からゆっくり来たらいいよーと伝えたリア（たぶん通じていない）は、紅竜と共に飛び立った。

（あっ！上空に待機させていた飛竜は離れて後を追ってきてるよ！）

目を覚ました男がギャアギャア騒いでいるが、リアは気にせず進むことにした。道案内に拳を振るっちゃったけど、仕方ないよね？

（興奮作用のある蘭菖は、竜には毒になる。僅かにだが人体にも。早く治療しないと…。）

まさか人攫い扱いをされているとは…リアは王都に着くまで気がつくことはなかった―。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3769y/

竜と戦女神の舞い降りた日

2011年12月22日23時47分発行